

楽観性の喚起がリスク確率判断の更新に与える影響

橋 本 勇 真

問題・目的：楽観性とは楽観主義傾向の高さであり、「楽観主義者は未来のpositiveなライフイベントが起こる確率を過剰に高く見積もり、逆に未来のnegativeなライフイベントが起こる確率を過剰に低く見積もる（Weinstein, N. D. 1982）」とされている。Sharot, Korn & Dolan（2011）において、高い楽観性を有する者は、negativeな情報による判断の抑制が解放され、リスクを無視し、リスクによる判断の変化が生じにくい可能性が示唆された。しかし、Sharot et al.（2011）においては、楽観性と楽観性に関連する変数と判断の更新の連続的な関係は、直接検討されていない。研究1ではリスク確率判断課題におけるnegativeな情報の更新量の低さとポジティブ・イリュージョン傾向・抑うつ気分・抑うつ傾向が負の相関を示すと考えられるという仮説の元、抑うつや楽観性に関連する複数の尺度とSharot et al.（2011）のリスク確率判断課題との関連を明らかにすることを目的とした。また、Miranda, Weierich, Khait, Jurska, & Andersen（2017）において、未来のポジティブな出来事をイメージさせるMental rehearsal課題を行った結果、抑うつ得点が高得点の実験参加者群において抑うつ的な未来予測が有意に減少することが明らかになった。しかし、これまでの楽観性に関する研究では質問紙を用いた意識的なレベルの楽観性の測定が行われてきたが、Sharot et al.（2011）の結果から楽観性について行動的なレベルでの測定の必要性が示唆されるが、Miranda et al.（2017）では、意識的に操作が困難な行動的指標からの楽観性は測定されていない。研究2では、介入群において、介入後に有意な抑うつ傾向の減少が確認され、リスク確率判断課題におけるnegativeな情報の更新量が統制群に比べ低い値を示すという仮説の元、Sharot et al.（2011）の課題を用いて行動的な指標から楽観性を測定することが可能かについて検討した。

研究1：大学生34名のポジティブ・イリュージョン傾向・抑うつ気分・抑うつ傾向を尺度で測定し、その後ネガティブな出来事が今後の自分自身の将来においてどの程度の確率で生じるかを問うリスク確率判断課題を行った。抑うつ低群においてのみ望ましくない情報の更新量と抑うつ傾向・抑うつ気分との間に正の相関が確認された。この結果から、抑うつ程度や抑うつ気分がリスク確率判断課題における望ましくない情報の更新量に関連があることが示された。Sharot et al.（2011）とは異なる結果ではあったが、抑うつ程度や抑うつ気分と楽観性の関係から考えると、Sharot et al.（2011）の課題を楽観性の測定に用いることは妥当であると判断した。

研究2：大学生71名を介入群と統制群に分け、実験課題の前に抑うつ程度と楽観性を尺度で測定し、さらにVisual Analog Scaleでも楽観性を測定し、群ごとの課題を行った後、リスク確率判断課題を行わせた。その後、再度抑うつ程度と楽観性を尺度で、Visual Analog Scaleでも楽観性を測定した。結果は、抑うつ程度で3群に分けた時に、介入群の抑うつが中程度の群において

介入の前後で抑うつ程度の有意な減少が確認された。また、介入群の抑うつが中程度の群においてリスク確率判断課題における望ましい情報の更新量が、抑うつが低程度の群・抑うつが高程度の群と比較して有意に高いことが確認された。Miranda et al. (2017) の結果とは異なり、Mental rehearsal課題を行った中程度の抑うつを示す群において、望ましい情報に対する認知バイアスが改善されることが明らかとなった。